

演奏に
役立つ

One Point Lesson

PERCUSSION

パーカッション

安藤芳広 あんどう・よしひろ



- ◆出身 都立豊多摩高校、東京芸術大学
- ◆所属 東京都交響楽団、武蔵野音楽大学、なにわ《オーケストラ》ウィンズ
- ◆趣味 食べる、読む、飲む、歩く
- ◆血液型 A型
- ◆星座 ふたご座
- ◆読者にひとこと 落ち着いて！でも進んでいこう
- ◆手紙の送り先 BJ 気付

今回も、「理想の音」を追求するよ

毎回みんなに「実験」や「練習」や「観察」をやってもらっているよね？ 我ながらしつこいとも思うけど、だってみんなったら、放っておくと見事にキレイさっぱり忘れて、すぐ元に戻っちゃうしさ……（泣笑）。

でも、そんなうちは「まだまだ」ってこと。僕の目標は、楽器を前にしたとき「理屈や約束ごととは忘れていても、自然に楽器を喜ばせ、音楽している」みんなの姿を見ることだからね。というわけで、今月もさらにしつこく追求していただきます！

■バチをにぎり締めると、なぜよくない？

みんなが楽器を使って発する「音」は、当然「音楽」として聞こえる音であるべきで、そうあるために大切なのが「響き」、そして「発音」だということは、もうわかっているよね？ 前回、理想的な音のイメージを持ってもらいたくて、ティンパニの上にバチを落としてみることを提案したけれど……、いくら理想的な音だからって、さすがにバチを落とし続けながら曲は演奏できないよね。というわけで、今回はバチは落とさずに本来のバチ使いをしながら、改めて「響き」と「発音」について実際に感じてもらおうと思います。

やはりわかりやすいのはティンパニ。これまで学んできた基礎を思い出しながらバチを持ち、手首を返して楽器の上に振り降ろしてみよう（＝要は楽器を叩いてみるってこと）。で、皮にバチが当たる瞬間、バチをギュッとにぎり締めてみて。聞こえるのは濁った音だし、音程は発音の後から聞こえてくるはず。いわば、これは理想の音の対極にある種類の音さ。でも、なぜ音が濁ってしまうのか？

それは、（バチを）にぎり締めると、そこには力が加わるわけで、その力を受けたバチは本来皮（楽器）を鳴らさなきゃいけないのに、それどころか、皮を押さえつけるようにその振動を無理やり止めてしまうことになる。よけいな力が楽器の自由を奪い、自然に鳴り

響くのが邪魔されている状態なんだから、良い音が聞こえてくるわけがないよね。

でもって、あえてダメな状態を感じてほしくてリクエストした「皮にバチが当たる瞬間、バチをギュッとにぎり締めて……」なんだけど、無意識にそうしている人って、実はとっても多いんだ。さらに困ったことに、無意識な力みを自覚するのは決してやさしいことじゃない。だからこそ「自分の発する音をよく聞くことが大切」って、しつこく言いたくなる僕の気持ち、わかってもらえるだろうか。

もし良い音が聞こえてこなかったときは、その音が生まれてきた過程をいちいち振り返って点検してみる。これも忘れてほしくない大事な作業だよ、しつこいけど。

■「理想の音」が聞こえる、◎な状態

ではせっかくだから、◎な状態も実感してもらおう。ここまで言われ続けていたら、良い音を導き出す方法については、頭ではもう考えられるよね？ そう、×になる原因である「よけいな力」がバチにも楽器にも加わらない、◎の状態を作るためには、やはりバチの自然な跳ね返りを追求すべし。その上で、バチが皮に当たったらその跳ね返り（落としたバチが弾む状態）を利用して、そのまま再び振り降ろすという一連の動作をつなげることができれば、発音時に濁りなく音程の聞こえる「理想の音」が聞こえるはず。ぜひこの動作を実現し、自分の発する理想の音を聞いて、感じてもらいたいと思うし、反対にこの音が理想の音に近ければ、そのバチ使い（動作）も◎である、ってことも忘れずに。

ちなみに、理想の音をより具体的にイメージするには、ピアノを弾いたときの音を思い浮かべるのがいいかもしれない。目指すべきは「常に発音のハッキリした豊かな響き」。ティンパニに関しては、ここに「音程感」という必須の要素が加わるよ。

■「スピード感」って？

と、ここまでくると、次なる問題はその理想の音たちをどう音楽として組み立て、つなげていくかということになるんだけど、ここでやっと（!?）「バチ先のスピード」という新たな注意ポイントが登場だ!!

いくら打楽器だからといって、ただ打点をつないだところで音楽にはならないし、まして「歌」など歌えない。曲中、たった一発しか登場しない音だったとしても、その音楽の流れの中で自然に感じられるスピードで入っていかなければ、音楽の一部にはなれないし、へたをすれば流れを止めて全体をぶち壊すことになってなりかねない。実は「理想の音」は奥深く、これが「理想の“楽音”」ともなれば、「響き」「発音」のほかに、その音楽にふさわしい「スピード感」っていうのも兼ね備えねばならないんだ。

なんて書くと、楽器を前に重～い気分になっちゃうかもしれないけれど、別にそれほど難しく考えることはない。ふさわしいスピードをつかみ取れば、その音楽を「ちゃんと感じて」歌ってみればいい。そうすれば、いま君が歌っているその歌には、必ずその音楽にふさわしいスピード感が、フレーズや表情としてついているはずさ。もしそれが合奏の場合なら、一緒に演奏する管楽器の息のスピードや、指揮者の棒のスピードからも、その場その音楽にふさわしいスピード感をつかむことができるだろう。そして、その歌（音楽）に明・暗や重・軽といった表情をつけることができるのも、まさにそのバチ先のスピード、発音、響きの成せるわざなんだけれど、このあたりは次回にじっくり。

で、最後にまた課題をひとつ（笑）。いま自分が演奏している曲について、「その部分部分にふさわしい音」とは、いったいどういう音なのかを具体的に考えてみる。そして、いまの自分が「そこで実際に出している音がどういう音か」をよく聞いてみて。